放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2019.01 No.37

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110
http://www.bpcj.or.jp/

TOPICS 今号のトピックス

■公開セミナー　映像アーカイブ活用と新たな展開2018
■公開セミナー　ラジオを楽しむ！〔8〕～ラジオが見つめる子どもたち～
■公開トークショー　『BSフジLIVEプライムニュース』
■2018 秋の人気番組展
■平成30年度第2回番組保存委員会
■外部セミナーや大学での番組利活用
■放送ライブラリー公開番組の紹介

■公開セミナー 映像アーカイブ活用と新たな展開2018

11月17日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催により、同大を会場に公開セミナー『映像アーカイブ活用と新たな展開2018　大学・図書館と放送ライブラリーの取組の報告』を開催した。放送ライブラリーの公開番組を大学の授業や公共施設で活用するサービスを利用した方々を招き、事例報告とパネル討論を行った。

[登壇者]　村上雅通（長崎県立大学 教授）
　　武田誠一（三重短期大学 准教授）
　　柴野京子（上智大学 准教授）
　　相良　裕（諫早市立図書館 館長）
[司　会]　音　好宏（上智大学 教授）

■大学および図書館での番組活用例

前半は、各登壇者が公開番組の利活用例を報告した。

村上教授は「映像研究」等の授業で、6年間、配信サービスを学生たちの事前視聴に利用している。「全てを視聴しなければ、作品の意図は伝わってこない」としたうえで、「映像には表情、言葉の語気、間合いなど、活字には表現できない情報が散りばめられている。しかも、それらの情報は物語の重要な伏線になる場合がある。一部を視聴して解説をする手法で講義しても、やはり物足りなさが残った。事前視聴によって映像に特化した解説が可能となった」と話した。

武田准教授の専門は社会福祉である。「ソーシャルワーク（社会福祉援助技術）を教える際に、お年寄りが具体的にどういう問題を抱えているのかを、テキストだけではイメージしづらいことが課題だった」と話した。また「認知症患者とその家族がテーマのドラマを見たことがあり、教材として最適だと思って探していたところ、この利活用サービスを知った。登場人物の生い立ちや家族との関係性が描かれたドラマを見ることで、目の前の高齢者にもそれぞれの人生や人間関係があることをイメージしやすくなった」と話した。

柴野准教授は昨年に続いての登壇で、「デジタルアーカイブ論」でメタデータ作成の実習に放送ライブラリーの未公開番組を利用した。「台本と映像を照合しながら、シーン表を作成したり著作権者をピックアップする作業等を通じて、学生たちは番組に含まれる情報の多様性や構成の複雑さ、また目的を持って保存された資料の価値を理解する」と話した。

相良館長は、諫早市出身の脚本家・市川森一さんのドラマ『親戚たち』をはじめ、4番組16本を視聴できるブースを館内に設けていることを紹介。「名誉館長であった市川さんの作品、また同市出身の役所広司さん主演ということで、他の視聴覚資料と比べても利用回数が格段に多い」と話した。「ドラマにエキストラ出演した市民も多く、地域性のあるコンテンツは市民の強い興味の対象となっている。原爆投下前日を描いた『明日』などは、もっとＰＲして多くの人に見てもらったらどうかという声もいただいている」と語った。

■パネルディスカッション

後半は、前半の報告を受けて、映像アーカイブの可能性や今後の番組利活用サービスに期待すること等について、意見交換を行った。番組を授業に取り入れることについて、村上教授は「事前視聴によっ

て、作品の構成や時代背景、制作意図などの解説に加えて、シーンごとに映像の持つ意味などの議論を深めることが出来た」と語った。武田准教授も「視聴後に学生にディスカッションをさせると、単に講義を聞いた時より深く考えていると感じる。政策や理論を理解するだけでなく、社会福祉には必ずそこに『人』がいることを、映像を通して実感してほしい」と話した。

柴野准教授は当該授業の中に、既存のアーカイブやネット上の情報を利用したテーマ研究も組み込んでいる。バブル時代をテーマにしたグループは、ネットやテレビで繰り返されるお立ち台のイメージに比べ、バブル経済の現実をあまり知らないことのギャップに気づき、大阪万博研究のグループは、組織的な記録映像が日本ではなく海外のAPアーカイブにあったことを報告したという。日本のアーカイブ映像の偏りという、本質的な問題が学生から指摘されたと言える。音教授は「米議会図書館のアメリカン・メモリーのように、国立のアーカイブにある種の政治性はつきもの。何を残していくかが非常に重要である一方で、インターネットで簡単に国境を越えられる現在、アーカイブのネットワーク化は意義がある」と語った。

今後の可能性について、相良館長は「各地の図書館が回想法に関心を持っている。アーカイブ番組を活用することで、成功への道が開けるかもしれない。また、どの図書館も様々なテーマで蔵書を紹介するミニ企画を行っているが、今後は映像と図書を連係させた展示もできるのではないか」と語った。

番組制作者でもある村上教授は「私は先輩の作品を見て勉強した。秀作が揃っている放送ライブラリーのアーカイブは“宝の山”。今後は、コンクールでの受賞作だけでなく、選から漏れた作品にも目を配る必要がある」と語った。武田准教授は「教員個人で収集できる番組には限界があり、網羅的に収集している所が必要。また、授業に役立つ番組をどうやって見付けるかが最大のネックだが、横浜に来て探さなければならないのは遠方の教員には負担が大きい。柴野先生がやられているように、詳細な番組内容が記載されていると、視聴したことのない番組でも内容が想像しやすくなる」と話し、柴野准教授も「テーマ別の番組リストを作成したり、どの授業で何の番組が利用されたかというノウハウを蓄積していくことで、他の利用者の参考になる」と話した。音教授は「映像アーカイブは、今後グローバル化やデジタル化が進んで行く中で非常に重要な価値を持つ。今回のような事例を積み重ねていくことが、次の時代につながっていく。番組センターをハブにして、公共施設としての図書館や、大学をはじめとする教育機関がつながっていくと、文化的にも領域的にも更に広がっていく」と今後の展望を語った。会場には教員や学生、放送関係者を中心に170名が集まり、多くの質問の手も挙がっていた。

■公開セミナー ラジオを楽しむ！〔8〕～ラジオが見つめる子どもたち～

10月28日、公開セミナー ラジオを楽しむ！〔8〕を開催した。今年度は、里親制度に注目し里親のリアルな声を伝えた『幸せのカタチ～本当の親子 本物の親子』(静岡放送／2017.5.28)と、貧困の子供たちの現状を問いかけた『1/6の群像』(CBCラジオ／2017.5.27)を取り上げた。両番組共、丁寧な取材から生まれた信頼関係により、取材を受けた人々の本当の気持ちが語られる。深刻なテーマでありながら、聴取者を番組に引き込む真摯なナレーションや巧みな構成が評価され、放送文化基金賞最優秀賞、文化庁芸術祭大賞ほか、各賞を受賞した。

[ゲスト] 原田亜弥子（静岡放送、『幸せのカタチ』ナレーション・企画・取材）、森理恵子（CBCラジオ、『1/6の群像』ディレクター）

[司　会] 石井　彰（放送作家）

原田氏は静岡放送の情報番組を中心に活躍するアナウンサー。番組のきっかけと反響について、原田氏は「育児休業を終えて仕事に復帰した時に、自分の子供を4人育てたあとに里子を育てている人の話を聞いた。自分の子供を育てるだけでも日々大変なのに、何故、血の繋がりのない他人の子供を育てられるのかという率直な気持ちから始まった。番組放送後『里親について初めて知った』『番組に後押しされて里親登録しようと思った』など、様々な意見が届いた」と話した。静岡市の里親委託率は全国的にも高い。その理由について、原田氏は「静岡は静岡市里親支援センターという独立したセンターがあり、児童相談所の役割を一部担っている。このセンターと里親会と児童相談所の連携が良く取れており、親も子も情報交換が出来る“里親サロン”があり、心の拠り所となっている」と説明した。また、「センターで『里親制度は子供の幸せのための制度』と教わった。その素晴らしい制度を伝えたいと思い、毎週のように里親サロンや里子のイベントに参加した。最初は里親の皆さんは取材に積極的ではなかったが、通い続けているうちに『ラジオだったらいいわよ』『今日お化粧していないから声だけならいいわ』などと気さくに言っ

てくださるようになり、その後、取材もすんなり出来るようになった」と振り返った。更に「『私達は子供に里親にしてもらっている。里親の里子に対する愛情の倍以上、子供は努力をしている』という言葉を聞いた時、私も自分の子に親にしてもらっているので、子供を育てるという意味では自分の子供も里子も変わらないと思うようになった」と続けた。

CBCラジオの森氏は、2016年には、野生の動物たちと人間の問題を描いた『贄の森』で数々の賞を受賞しているが、『1/6の群像』では貧困という全く違うテーマに挑んだ。その理由について、貧困を経験した歌人の鳥居氏との出会いが大きかったという。そこから子供の貧困について調べていくと、6人に一人は貧困という事を知り、その後、名古屋市北区の図書館や子供食堂の人達との出会い、無料塾への取材と繋がっていった。無料塾の先生や子供達は、最初からインタビューに答えてくれた訳ではない。森氏は「『また来たよ、あのおばさん』という感じで、何年も張り込んだ。そのうちに、子供がびっくりする事実を語ってくれる瞬間に立ち会えた。それまでは、プライバシーの問題もあり、先生もなかなか話してくださらなかったが、取材する事で先生達の心も動き、子供にもっと、踏み込んでみようと思ってくれた」と振り返った。

ここで番組に登場した歌人の鳥居氏が登壇し、多くの反響をよんだ歌集『キリンの子』(2016/KADOKAWA) より、いくつか短歌を披露した。鳥居氏の短歌には生きることの苦しさや社会的なテーマが生きた言葉で歌われている。

最後に、子供が安心して育つ、元気に生きられる社会を作るにはどうしたら良いかという問いに、原田氏も森氏も“地域”のコミュニティが必要と答えた。

会場からは「ラジオがこんなにも力強いメッセージを届けられると分かって良かった」「ラジオの良さが伝わるセミナーだった」「2つの問題について、興味深く考えさせられた」など様々な声が寄せられ、音だけで伝えるラジオの力を改めて感じるセミナーとなった。

■公開トークショー「BSフジLIVEプライムニュース」

11月10日、公開トークショー「ＢＳフジＬＩＶＥプライムニュース」を開催した。『プライムニュース』は、毎回1つのテーマに絞り、そのテーマに相応しいゲストを招き、2時間生放送で徹底議論する。2009年4月からスタートし、10年目を迎えた。

トークショーの登壇者は、メインキャスターでフジテレビ報道局解説委員の松山俊行氏、チーフ・プロデューサーの上野修平氏、そして番組キャスターでフジテレビアナウンサーの竹内友佳氏が進行した。

松山氏は昨年4月からメインキャスターを務めている。報道記者を目指すきっかけとなった大学時代の留学経験、ワシントン支局の記者時代の9.11テロ事件、イラク戦争、オバマ政権、トランプ大統領の取材など数々の貴重な経験を紹介した。キャスターの仕事は初めてだが「当事者から話を聞き出し、その内容をニュースとして流す。やっている事は記者と変わらない。スタジオも一つの現場という意識が持てるようになった」と語った。独自のスタイルを守り続けているプライムニュース。番組の立ち上げから関わっている上野氏は「報道番組の制作は初めてだったので、新しい報道番組を作りたいと思った。地上波が羨ましがるような番組を作ろうとスタッフを鼓舞し、少人数のゲストに2時間生放送で話を聞く事にこだわってやり続けてきた。今、ＢＳの報道番組の競争が激しくなってきているが、切磋琢磨していく良いきっかけになると思う」と述べた。12月1日から『プライムニュース』も4K放送になった。松山氏は「人間は表情を見ていると本当の事を言っているかどうか分かる。4K映像になるとそれが如実になる」と言うと、上野氏が「映像がクリアになるのは素晴らしいが、大事なことは中身。聞き出す、こだわる、公平である、交渉力をもつ、この4Kを胸にやっていきたい」と締めくくった。

■2018 秋の人気番組展

10月19日～11月25日、地上8局、BS7局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。各局の新番組や人気番組のポスター、台本、小道具、セット模型・デザイン画、関連グッズなどを展示した。テレビ朝日『僕とシッポと神楽坂』のイベントで使用された法被やTBS『下町ロケット』のスケールの大きいセット模型、フジテレビ『SUITS』の小道具（キャラメルボックス）など、それぞれの局ならではの展示物も注目を集めた。また、12月1日に始まった4K8K放送を映像や配布物で紹介した。「見応えがあった」「素晴らしい映像だった」等、来場者から新時代の美しい映像に期待する声が寄せられた。

■外部セミナーや大学での番組利活用

【番組上映会とセミナーでの利活用】

11月3日、市川森一脚本賞財団主催の企画「テレビドラマの巨人たち～人間を描き続けた脚本家　第2回『向田邦子　ひと、その哀しみと可笑しさ』」が千代田放送会館で開催された。

放送番組センターは本企画に共催として参加し、向田邦子脚本作品である「隣りの女　現代西鶴物語」、「あ・うん　第1回『こま犬』、最終回『弥次郎兵衛』」の3本を横浜の放送ライブラリーからストリーミング送信し、上映した。番組の上映後に行われたシンポジウムでは、出演者や制作者が登壇し、作品と向田邦子の魅力を時代背景を交えながら語った。当日の来場者は100名であった。

【大学教育での番組利活用】

2018年度後期は、次の3大学3講義で放送ライブラリーのテレビ、ラジオ番組が活用された。愛知大学・地域政策学部「社会福祉政策論」と皇學館大学・現代日本社会学部「公的扶助論」に各テレビ番組1本が、早稲田大学文化構想学部「日本近代文学とマスメディア2」にテレビ番組3本とラジオ番組4本が、それぞれ活用された。

■平成30年度第2回番組保存委員会

11月21日に平成30年度第2回番組保存委員会が開催され、以下の事項が承認された。

◇平成30年度保存対象番組の選定

テレビ番組は平成28年度放送分の1,086本を保存対象番組として選定、ラジオ番組は29、30年度放送分のリストアップ済み162本に加え、11月以降発表される受賞番組約200本を追加して選定。また、放送番組センター協賛番組19本、ならびに芸術祭賞受賞番組で未保存の41本の提供依頼を行う。

◇仙台での東日本大震災関連番組の合同上映会開催

仙台のテレビ各局が開催を計画している東日本大震災関連番組の民放・NHK合同上映会に協力する。広島・長崎での合同上映会で実施してきたのと同様に、放送ライブラリーから番組をストリーミング送信する。

◇ジャパンサーチへの連携データの利用条件について

各分野のアーカイブ機関の統合ポータルサイトである「ジャパンサーチ」と連携するデータについて、国立国会図書館へ提出する回答書には、当センターから提供するメタデータは、「二次利用は不可とする」ことと、「7ファクトデータの項目名」を明記する。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,506本、ラジオ番組4,430本、テレビ・ラジオCMを11,071本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している。平成30年10月から11月に追加公開した主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

◇『ほっとネットとうほく　福島の願いの歌』2012年1月14日放送・福島放送

◇『そうか、もう君はいないのか』2009年1月12日放送・TBSテレビ

◇『赤と黒のゲキジョー　上流階級～富久丸百貨店外商部～』2015年1月16日放送・フジテレビジョン

◇『希望の翼　～あの時、ぼくらは13歳だった～』2013年3月2日放送・テレビ神奈川

【ラジオ番組】

◇『伊奈かっぺい 旅の空うわの空　今年も弘前翠明荘』2017年10月16日放送・青森放送

◇『ＳＢＳラジオギャラリー　幸せのカタチ　～本当の親子　本物の親子～』2017年5月28日放送・静岡放送